

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第十一主日(8/28)礼拝

「神の救いの物語」

使徒言行録第7章8節から16節 説教原稿

【聖書】

使徒言行録7:8 そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。

9 この族長たちはヨセフをねたんで、エジプトへ売ってしまいました。しかし、神はヨセフを離れず、10 あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオのもとで恵みと知恵をお授けになりました。そしてファラオは、彼をエジプトと王の家全体とをつかさどる大臣に任命したのです。11 ところが、エジプトとカナンの全土に飢饉が起り、大きな苦難が襲い、わたしたちの先祖は食糧を手に入れることができなくなりました。12 ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まずわたしたちの先祖をそこへ行かせました。13 二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分の身の上を明かし、ファラオもヨセフの一族のことを知りました。14 そこで、ヨセフは人を遣わして、父ヤコブと七十五人の親族一同を呼び寄せました。15 ヤコブはエジプトに下って行き、やがて彼もわたしたちの先祖も死んで、16 シケムに移され、かつてアブラハムがシケムでハモルの子らから、幾らかの金で買っておいだ墓に葬られました。

1 ステファノの説教が言いたいこと

ステファノは無実の罪で不法に逮捕されます。そして、最高法院に引き出されて、「イエスを信じるこの男は、イエスと同じように、我々ユダヤ人たちが大切に守って来た祖先からの信仰、つまり、律法と神殿を破壊しようとしている」という偽りの罪で訴えられます。「この者達の訴えの通りか」、大祭司に尋ねられ、ステファノが主イエス・キリストを信じる信仰について語ったのが、使徒言行録第七章に納められている説教です。この説教には、新約、旧約を貫くとても重要な事が二つ描かれています。一つは、「旧約聖書に描かれている天の御神の在り方は、主イエス・キリストにこそ最もはっきりと現れていること」そして、「父なる御神を主イエスを通じて信じ、聖霊の導きによって生きることこそ、アブラハムの信仰、モーセの信仰を引き継ぐもの」という事です。この二つのことを考えつつ聖書を読むと、「父なる御神は、私たちが救うという計画をもっておられ、その計画に信仰者を参加させようとしておられる」と分かります。今日は、ステファノがヨセフ物語を通じて示す「神の救いの物語」の不思議が現代を生きる私たちに語りかける言葉に、共に耳を傾けていきたい、と思います。

2 イサク、ヤコブ

8節にはアブラハムから始まる系図が短く紹介されています。アブラハムと妻サラの間には、イサクが生まれます。長い間、子どもが生まれなかった年老いた夫婦に神が約束された子どもです。創世記を読んでいると思わされることは、数千年前も現代も、夫婦、親子という家族の間には様々な問題を孕んでおり、何の問題もない完璧な家庭などない、それでも神は見捨てずに導いていかれる、という事です。創世記には、リアルな人間ドラマとそこに働かれる神の慈しみが画かれており、そこかしこに自分達を見つけることができます。皆さんと一緒に読んで味わいたいところですが、その時間はありません。興味ある方は、今晚でも自宅で創世記を是非、読んでみてください。何度読んでも興味深く新しい発見が詰まった物語の連続です。

3 ヤコブ、ヨセフの物語

さて、神がアブラハムとサラにくださった約束の子イサクは妻リベカの間には双子の息子をもうけますが、弟はヤコブと言いました。彼は、四人の妻を持ち、その間に十二人の息子をもうけます。このヤコブの十二人の息子が、後のイスラエル十二部族の直接の祖先だと伝えられます。ステファノは彼らを「族長」と呼んでいます。さて、四人の妻のうち、ヤコブが深く愛したのは、ラケルという女性でした。しかし、皮肉なもので、ヤコブは他の三人の妻の間には、次々と子どもが生まれるのですが、最も愛するラケルとの間には、長い間子どもができません。ラケルは他の妻たちに嫉妬し苦しみます。ようやくラケルがヨセフを身籠った時、ヤコブは年をとっていました。そして、愛妻ラケルは、ヨセフの弟ベニヤミンを出産した時に亡くなります。だからでしょうか、ヤコブはラケルとの間の二人の息子を、あからさまにひいきし、残りの十人の息子を軽んじます。ヤコブは、十人の兄たちは羊飼いの仕事にこき使っていたようですが、ヨセフには仕事をさせず、晴れ着を着せて、手元に置いて可愛がったりしました。このヤコブのヨセフ達への溺愛が、息子たちの間に分断を生みます。そして、ヨセフは、父の過保護のもと、傲慢な若者に成長します。

創世記を読むと、十人の兄たちがヨセフを妬み嫌ったのも、無理のないこと、と思われます。ですが、兄たちはヨセフの事で神に祈り続け、助けを求め続ける事をしなかったのではないのでしょうか。ヨセフが父ヤコブの使いで、一人きりで、兄たちが羊を飼う野原にやって来るのを見ると、彼らはヨセフをとらえて穴に放り込み、弟を殺す相談を始めます。しかし、兄たちが相談している間、そこを通りかかったキャラバン隊がヨセフをとらえ、他の人々の手を経て、彼はエジプトにまで連れていかれます。そして、エジプト帝国の王・ファラオの侍従長・ポティファルの家に奴隷として売り渡されます。ヨセフはポティファルの家で、奴隷として勤勉に務め、知恵を用いて働いたので、主人から信用され家の事一切を任されるまでになります。しかし、次の試練がヨセフを襲います。ポティファルの妻の誘惑です。彼女の誘いを毅然と断ったヨセフですが、強姦未遂という無実の罪をでっちあげられ監獄へとつながれてしまいます。しかし、この監獄でも看守長の気にいられ、獄中の人々の世話を任されるよう

になった、と創世記は語ります。この監獄で、ヨセフは、ファラオの逆鱗に触れて監獄に入れられた給仕頭と料理長と出会い、二人の世話をする事となります。数日後、給仕頭と料理長は、同じ夜に不思議な夢を見ますが、その意味が分かりません。ヨセフは二人の夢を説き明かします。給仕頭の夢は、ほどなく彼は釈放される、というもの、一方の料理長は、間もなく処刑される、と言うものでした。ヨセフの夢の説き明かしはその通りになります。彼は、釈放される給仕頭に「私の事を思い出してください」とファラオへの執り成しを頼みます。しかし、釈放されたとたん、給仕頭は哀れなヨセフを忘れてしまい、二年間思い出すことがありませんでした。ヨセフは二年間、監獄の中で釈放の日を今か今か、と待ち続ける事となります。

やがてエジプト王ファラオは不思議な夢を見ます。エジプト中の賢者や魔法使いも誰一人説き明かす事ができない夢でした。この騒動を見ていた件の給仕頭はようやく、監獄の中で自分の夢をずばり説き明かした若者を思い出します。ヨセフはやっと宮廷に呼び出され、ファラオの見た不思議な夢を見事に説き明かします。そうして、ファラオに取り立てられ、宰相にまでなります。ファラオの夢を通して、神が予告された大飢饉にエジプト全土をあげて備えるためでした。

故郷から拉致されてから二十年以上の時が立っていました。かつての鼻もちならない傲慢で身の程知らずな若者は、苦労に苦労を重ねて、洞察力に優れた、知恵溢れる有能な行政官となったのです。このヨセフの十数年のエジプトでの日々を、ステファノは次のように短く要約します。「神はヨセフを離れず、あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオのもとで恵みと知恵をお授けになりました。そしてファラオは、彼をエジプトと王の家全体とをつかさどる大臣に任命したのです。」

4 ヨセフ物語 VS サクセスストーリー

しかし、神は、ヨセフに、直接、お金や地位、頼りになる人脈などを与えたわけではありません。そういう点では、童話に出て来るシンデレラや白雪姫などに出て来る「魔法」とは異なります。ヨセフは、幾度となく襲い来る試練にあいつつも、それでも腐ることなく、絶望する事なく、ひねくれる事なく、その時、その時に与えられる自分に為すべきことを精一杯やって、前向きに歩み続けました。奴隷としてボティファルの家で働いた時も、監獄の中でも、周囲の信頼を勝ち得て自分の居場所を作っていく、遂には、古代世界の超大国・エジプト帝国のナンバー2にまで昇りつめます。本当にすごいことです。

しかし、これだけ聞くと、現代のおとぎ話、手垢がついたサクセス・ストーリーと大差ありません。では、ヨセフ物語と現代のおとぎ話・サクセスストーリーとどこが違うのでしょうか。

神が共にいてくださった、神がヨセフから離れなかった、という点が決定的に違います。ヨセフだって人間です。兄たちから捕らえられ穴に突き落とされた時の驚き、痛み、ミディアンの隊商に穴から引き上げられ捕らえられ、イシュマエル人に売り渡されて砂漠を超えて旅をした時の不安、エジプトまで連れて行かれ奴隷として売られた時の戸惑い、彼はどれほど心

細かったか悲しかったか、どれほど父や弟が恋しかったか。しかし、神が離れずにいてくださったおかげで、頼る者もない異国の地、習慣も風俗も全く違う所で、何も知らない、わがまま放題に育てられたヨセフが、懸命に働き、主人の信用を得る事ができたのだと思います。しかし、それも束の間、全くの無実の罪で数年間、牢獄にとらえられます。彼の気持ちは想像してあまりあります。時には、深く落ち込み、絶望しかけた時もあった、いえ、絶望したに違いありません。しかし、彼が絶望から立ち上がり前を向くことができたのは、希望の神が共にいてくださったからです。「必ずあなたの子孫を救い祝福する」と、曾祖父アブラハムに約束してくださった神がおられたから。深く落胆した時、どうしたらよいか全く分からなかった時、生きる希望が断たれたと思った時もあったでしょう。恐らく眠れずに過ごした夜も一晩や二晩ではなかった。悩み迷い、孤独にもだえた時もあったでしょう。そんな時、ヨセフは自分の体に刻まれた永遠の契約の徴を見て神の約束を思い起こしたに違いありません。そして、この神の約束に希望をおき、神の名を呼び求めたのだ、と私は思います。

神は彼の叫びに答え、具体的な知恵を与えてくださいました。為すべきことを示してくださいました。そして、八方ふさがりの状況を打開してくださいました。神との対話のうちに、祈りのうちに、彼は人間について、この世についても深く学んでいったでしょう。このような神に救われ神に教えられる経験を重ねていったヨセフは、「神は、どんな時も私を離れずにいてくださり、知恵と恵を与えてくださる」という確かな希望を抱くようになったのだと思います。

ローマ書のパウロの言葉が思い浮かびます。「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を産むということを。希望は私達を欺くことはありません。私達に与えられた聖霊によって神の愛が私達の心に注がれているからです」(ローマ書5:5~7)。現代のサクセスストーリーでは、主人公は自分や人間に希望を置き自力で頑張ります。しかし、聖書の物語では、自分に希望を置くのではなく、人間を深く愛する天の父なる神に希望を置き、自分に与えられた能力を神によって引き出して頂きます。ヨセフもそうでした。

そして、ヨセフに働かれた神は、私達にも同じように働いてくださいます。離れずに共にいてくださり、叫び求める私達の為に必要な知恵と恵を与えて、為すべきことを示してくださいます。何故なら、御子キリスト・イエスを受け入れた私達には、御子の霊、聖霊が与えられているのですから。ですから、私達も又、ヨセフと同じように神と共に物語を紡ぐ一人一人です。

5 救いの物語は十字架と復活イエス・キリストを目指して進む

さて、現代のサクセス・ストーリーと、ヨセフ物語はじめ神と共にある物語で、決定的に異なる点がまだあります。それは、「聖書の物語は、人間の成功を目的としてはいない」という事です。ヨセフのエジプトでの成功は、神の大きな目的への経過にすぎません。

宰相ヨセフは、飢饉の前の豊作の時に国をあげて食糧を備蓄するように指導します。そ

して、ファラオの夢をヨセフが説き明かした通りに、エジプトからカナンに渡る広い地域を大飢饉が襲います。カナンに住むヤコブ一家も切羽詰まります。「エジプトには穀物がある」と聞いた人々が、世界中からエジプトに押し寄せます。ヤコブの息子たちもその中にいました。ヤコブは、ヨセフの兄である十人の息子たちをエジプトに派遣し食糧を調達させます。エジプトへやって来た兄たちは、宰相となったヨセフに気づきません。ヨセフは死んだもの、と思っていたのです。ヨセフは兄たちに自分の正体を明かさず、食糧を持たせてカナンに帰します。やがてその食糧も尽きますが、飢饉は終わりません。兄たちは、再びエジプトへと降ります。様々なことを経て、遂にヨセフは兄たちに自分の身元を明かして、次のように言います。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、私をここに売ったこと悔やんだり、責めあつたりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなた達より先におつかわしになったのです。神がわたしをあなた達より先にお遣わしになったのは、この国にあなた達の残りの者を与え、あなたたちを生きながらえさせて、大いなる救いに至らせるためです。私をここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。」(創世記45:4~8)。

神は、イスラエルを、世界を飢饉から救うため、彼の兄弟たちを救うために、エジプトにヨセフを先に送って、飢饉の備えをさせたのでした。何年も続く飢饉への備えができるほどの力があつたのは、当時の世界ではエジプト帝国だったのでしょう。この点が個人の成功に焦点をあてる現代のサクセス・ストーリーとは異なります。

そして、このヨセフ物語が指さすもの、それは、神の救いの計画の頂点にあるイエス・キリストの出来事です。主イエス・キリストは神の最愛の独り子、全知全能の御神、無から有をつくり出す御神と等しい方。それにも拘らず、私たち人間と同じになり、私たちのきょうだいになってくださったのです。しかし、神の独り子がその在り方を変えてまで愛した人間達が、彼を十字架に架けて殺してしまいます。そこには、人となった神の独り子が、人間の代表として十字架に架かり、全ての人間の罪を肩代わりして死ぬことで、神に叛く人間の罪を神が赦し、全ての人が神の御許で生きることができるため、という神の秘められた計画、人間には思いもつかない神の御心、神のご計画がありました。

しかし、神は、ご自身の救いの計画を人間なしで行おうとはしません。決定的なことは神がなさいます。が、私達人間をも又、神の救いの計画に参加させようとなさいます。主イエスが、使徒たちに「**聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てまで私の証人となる。**」と仰ったのはこの為です。父なる神は主イエス・キリストの証人として使徒達を救いの計画に参加させ、神の国を宣べ伝えさせました。そして、私達横浜ナザレン教会は、使徒の後に倣う者達であり、信仰において、アブラハムの子孫です。

私たちをも参加させて紡がれる神の救いの物語は、イエス・キリストの十字架と復活の物語を中核として、旧約の語る時の始まりへ、黙示録が示す時の終わりへ、過去と将来に向かって広がって行きます。太古の昔に始まり、時の終わりに至るまで、神のご計画に沿って

続く壮大な神の救いの物語です。私達もその壮大な物語に参加するように神に招かれているのです。神は、ヨセフに、使徒たちに、ステファノにそうであったように、私達一人一人それぞれに、ご計画を持っておられ、救いの物語に参加させようと考えておられます。

しかし、私達を洗脳し、無理やり支配して物語に参加させようとはなさいません。私達には、いつも応答の自由があります。神により頼まず、自力で生きるのか、神により頼み、神からの恵みと知恵によって歩むのか、選び取る事は私達に委ねられています。何度選ぶ事に失敗しても、又、神の御許に立ち帰ってやり直せばいいのです。チャンスは生きている限り与えられています。キリスト者の特権は、ネバーギブアップ、諦めなくてよいことにあります。何故なら、主にある希望は滅びないのですから。

ヨセフの試練の日々がそうであったように、神は、私達の一日一日にも、確かな計画をもっておられます。私達の何気ない一日一日も、神を呼び求め従いゆくことで、神の救いの物語のかけがえのない一ページとなる、儂い塵にすぎなかった私達を深く愛し、ご自身の救いの物語に用いてくださる天の父なる神を賛美したいと思います。